

朗読劇 アジャセ物語

出典：『観無量寿経』・『涅槃経』 ～釈尊の御説法～
原作：『王舎城物語』渡辺愛子・『アジャセ物語』岡本禮子
脚本： 中村直美

照明:本堂の舞台上方とスポットライトON 内陣は全てOFF

【ヴァイオリンのみ起立・他 着座】

♪音楽(登高座曲:この安楽国の天人も)

【語り 阿闍世 起立】

今から2500年余り前のことです。

インド・ガンジス川の南にマガダという大きな国がありました。

美しい山々に囲まれた王舎城を都に頻婆娑羅という大王が国を治めていました。

王は、お釈迦様を篤く敬い、自ら進んでお説法に耳を傾け、

また、ひいては国民の為になると、寄進も惜しみませんでした。

さて、お釈迦様の教団に提婆達多というお坊さんがおりました。

彼はお釈迦さまの従兄弟にあたる人で、教団の中では人望もあり、実力者でもありました。

一方でお釈迦さまは、教団の中だけでなく多くの人々にとって、限りなく尊い方でした。そんなお釈迦さまを、提婆達多は従兄弟という近い間柄のせいもあって、正しく理解することができませんでした。

お釈迦様を慕い 敬う人々が日ごとに増えることを、提婆達多は腹立たしくねたましく思いました。

提婆達多「人々はその人をお釈迦様と呼んで敬うが、この私提婆達多と釈迦とどれほどの違いがあるというのか。私にだってあのくらいのことはできる。彼は年をとってきたことだし、こころで私に跡目を譲ってもいい頃だ・・・」

野心を実現させようと提婆達多は、国王の息子である皇太子阿闍世に近づきました。

【語り 着席】

提婆達多「アジャセ太子、太子は国の将来をどうお考えですか。今の繁栄に溺れていれば国は滅びてしまいます。ところが王は今のままに満足。周りの国を攻めようとはされない。

王のお年からすれば無理もないとも言えませんが・・・。

それはともかく、王はお釈迦さまの教団へ限りなく寄進される。これでは巨万の富もやがて尽きてしまいます。今のうちにこの国をゆるぎない大国にしておきませんか・・・」

阿闍世「何を申すか、提婆達多。それは父王のお決めになることだ」

提婆達多【唇に薄笑いを浮かべ、射すくめるように太子の顔を見すえる様子で】

「太子は王の本当のお姿をご存知でない・・・」

「王は決して太子に位をお譲りになりはしない。太子、あなたの方から奪い取らない限り、この国の将来はないのです」

阿闍世「大王に対して何という事を、慎みたまえ」

提婆達多【太子にたしなめれてれも意にも止めず、かえって語気を強めて続ける】
「太子は王を信頼しているご様子だが、それは危険です。太子を愛しているふりも今のうちだけです。こんなに立派に成長されて、もういつでも力で王位を奪い取ることができます。王はそれを恐れて、いつ太子に刺客を向けようかと思案しておられるのです」

阿闍世【声をふるわせて提婆達多につめよるように】

「馬鹿な、それ以上いいかげんなことを言うと、出家の僧といえども許しはしないぞ」

提婆達多「太子よ、落ち着いて下さい。わたしは誰よりも太子のためを思って、言いにくいことを敢えて申し上げているのです。
いいですか、よくお聴きください。さあ太子あなたの手をご覧ください。小指の骨が曲がったままでしょう。何故だかご存知ですか。
太子がお生まれになるとき、王は、イダイケ王妃に命じ、あなたを高殿の上から産み落とさせたのです。ところが、あなたは奇跡的に、小指に傷を負っただけで、全く無事だったのです。」

阿闍世「た、た、 たわけたことを・・・」

提婆達多「いえ、王が産声をあげたあなたを殺そうとしたことは間違いない。
太子、あなたのことをひそかに〈未生怨〉と人々が陰口していることをご存知じないでしょうか。
未生怨、それは〈生まれる前から怨みを抱けるもの〉という意味です。
王に対する怨みを抱いたあなたが生まれてくることに、王は、恐れをなし、あなたの殺害を企てたのです。」

阿闍世「私が 父に怨みを抱いて生まれただと・・・？ そなたは、いったい何のことを言っているのだ？」

提婆達多「いいですか。良くお聞き下さい。あなたの両親、頻婆娑羅王とイダイケ王妃は、長い間お子様を授かることができなかつた。思いあまつた王は、占い師を呼んだのです。〈北の山奥に住む年老いた仙人が3年後に自然の死を遂げる。その後イダイケ王妃の胎内にこの国のお世継ぎとして宿られる。〉占い師は、3年待つようにと告げたのです。なのに王は、一刻も早く世継ぎが欲しいと、待つ事をせず、家来を北の山奥へと遣わした。〈国の為に自ら命を捧げることを仙人に勧めよ、もしこばめば、即刻 殺せ。〉と」

阿闍世「もうよい！それ以上を言うな！」

提婆達多「いや、太子、あなたは王の殺意から目をそらせてはならない！　そう
す、自害することを拒否した老仙人は家来の手によって谷底深く突き落
とされた。仙人の獣のような叫び声が、長く尾を引いて山々にこだまし
た。仙人、いやくあなたが発したその声を、太子あなたは覚えている
はずだ。
そうです！王はあなたを恐れている。老仙人の怨みをあなたが引き継
ぎ、その怨みをはらす日が来ることを。」

阿闍世「なんということだあああ！！！」

【語り 起立】

提婆達多「さあ、太子。あなたは、殺される前に、王から位を奪い取ってこの国の
新しい王となられよ。わたしは、釈迦から指導権を奪って教団を一
層大きくする。いいですか、わたしたちはこの国の歴史を作る重大な盟
友なのです。力を合わせて夢を実現させるのです。」

その夜、太子は一睡もしませんでした。

【提婆達多 退出】

【頻婆娑羅 起立】

♪音楽〈♪おわり〉まで ナレーションと重ねてBGM
オペラ「優雅なインドの国々」より“ロンド” F.ラモー作曲

太子が、武術の稽古の見学にやってきた父王に対して剣を振りかざしたのは、それから間もなくのことでした。怨みと怒りと憎しみに燃え狂っている我が子の二つの眼…そこから全てを覚った頻婆娑羅王は、阿闍世太子の剣をシカと受け止めていた大臣に命じました。

頻婆娑羅「もうよい。太子の思うままにさせよ。」

悲しく穏やかな、そして厳かなその声に、さしもの阿闍世太子もおおきくひるみ、ふりかざしていた剣を降ろしました。

阿闍世「この者を牢獄へ。そして厳重に見張るのだ」

♪おわり

頻婆娑羅王が牢獄に幽閉されて三週間が過ぎました。
新王阿闍世は新しい政策に着手し、提婆達多に多額の寄進をして精力的に活動していま
した。その間、心には絶えず父・頻婆娑羅王がありました。

まず浮かんでくるのは、国民の敬愛の的、偉大な王の笑顔。次いで落ちくぼんだ眼、のびほうだいの髪、やせ細った顔。最初はそれに怯えていましたが、提婆達多に会うたびに阿闍世の心は変わってゆきました。

阿闍世は思いました。

阿闍世 ……父上は自らの悪事の報いを受け、それを償っているのだ。わたしには何の責任もない。父上の苦しみが大きければわたしへの罪がそれだけ大きいのだと思い知ればよい……

もはや偉大な王の顔はうかばず、飢えと乾きにのたうちまわる姿を思い浮かべて、阿闍世は、ひとり勝利の笑みを浮かべました。

阿闍世 ……いかに屈強な父も、もう息絶えたであろう……

阿闍世は牢獄へ父の死を確かめに出向きました。

阿闍世「おい番人、父上の様子はどうじゃ？」

牢番[体をこわばらせている様子で]
「はい、お健やかにおいでです」

阿闍世「何と申す。それは一体何故じゃ」

牢番「はい、お妃さまが毎日お見舞いなさいますし、お釈迦様のお弟子方が高窓から入って説法なさいます」

阿闍世「何と、母上が毎日食事を運ぶと申すか」

牢番「いえ、何もお持ちにはなりません。ただ、お体から甘い良い香りが……」

阿闍世「おのれー！！ 国賊に味方して私にはむかう上は、母といえども許せぬ。それにしても いまいましい釈迦めー、提婆達多は何をぐずぐずしておるのか。よいか、牢の高窓をふさげ。釈迦の住む山を二度と見上げることが出来ぬようにしてしまえ！ 今、すぐにだ！」

厳しく命じ、次に阿闍世は宮殿へかけ戻りました。怒りの炎を激しく燃えたたせ、床をふみならして母イダイケの部屋へふみ入りました。急を告げる侍女の叫び声。それより早く、月光・耆婆 二人の大臣がかけつけました。阿闍世は刀を抜いてまさに母に切りつけようとしていました。

月光大臣「王さま、申し上げます。わが国の長い歴史の中で父王に手をかけたお方

はありますが、母上に刃を向けた王族はいまだかつて一人もおられませぬ。その刀、どうしてもお納め下さらぬ時は、私共はもはやあなたにお仕えすることはできません。お覚悟いただきます」

万貫の重みをこめた月光大臣の言葉。また、耆婆大臣は、無言で刀に手をかけ、阿闍世に対して鋭い眼光を送っていました。さすがの阿闍世も 抗しきれず、刀を捨てました。母イダイケを指さして言いました。

阿闍世「この者を宮殿の奥の間に閉じ込め、厳重に見張っておれ！」

♪ 音楽(着座曲:弥陀初会の聖衆は)

【音楽始まりと同時に アジャセ、月光大臣、語り 着席】

♪ 音楽 〈♪おわり〉までナレーションと重ねてBGM

「インドの歌」リムスキー・コルサコフ作曲

(*最初の数小節を飛ばして重い調子に変化するところから)

【音楽始まりと同時に アジャセ、イダイケ、語り 起立】

マガダ王国、王舎城。

ひととき あらゆるいのちを焼き焦がしたかと思われるほどの 暑さのある日の午後。

宮殿の中もすっかり風のそよぎを忘れたかのようにでした。

誰もが、燃えさかる太陽が西に傾くのをじっと待っていたとき、

♪ おわり

幼な子の激しい泣き声の人々を驚かせました。

阿闍世の王子優陀耶が火がついたように泣き出したのでした。

紅葉ほどの小さな手の指が一カ所ひどく腫れていました。妃も乳母もおろおろしているところへ

阿闍世がかけつけました。優陀耶の指を見るなり、阿闍世はウダヤを抱き上げ、その指に自分の唇を押し宛て、膿を一気に吸い出しました。

今では幽閉から解かれていた王の母イダイケも、泣き声をききつけてやって来ました。

阿闍世「あ、母上。もう心配はありません。」

イダイケ「おお、阿闍世、あなたも……」

イダイケ【サリーで涙を隠すような様子で、遠慮がちに】

「あなたがちょうどこの優陀耶ぐらいのとき、やはり指がひどく腫れてそ

それはそれは大変でした。でも父王さまが今のあなたと同じようにしっかりと膿を吸い出して…ああ…」

その一瞬、阿闍世は、針の束が 心臓に つきささったかと思いました。

阿闍世「ああ、なんということだ！ だれか、だれか、ただちに牢獄へかけつけ、父王をお出し申せ、急げ、急ぐのだ！！」

☆喚鐘☆ ガン、ガン、ガン、ガン、ガン…(9回程 慌ただしい足音風に)

牢獄の頻婆娑羅王は あわただしい足音が近づくのを耳にして、(いよいよ阿闍世が刺客を差し向けた)と思いました。

頻婆娑羅「わが子に父殺しの罪を背負わせてはならない。阿闍世よ、これが父の最後の贈り物じゃ」

☆喚鐘☆ ガ～ン、ガ～ン、ガ～ン (3回 重々しく ゆっくりと)

重い扉がきしんだとき、王は自ら命を絶ちました。

♪音楽(く♪おわり)までナレーションと重ねてBGM)
小葬送行進曲 ハ短調 K.453a モーツァルト作曲

その夜、阿闍世は原因不明の高熱に倒れました。続いて全身に腫れ物ができ、激しい痛みに加えて腫れ物から染出る膿が耐え難い悪臭を放ちました。見舞おうとした妃でさえ、その激臭に気を失いました。医師にも手の施しようがありません。

母のイダイケは頻婆娑羅王の一足違いの死の悲しみを必死でこらえつつ阿闍世の看病をしました。伝来の特効薬も かいなく 病状は悪化するばかりでした。高熱と激痛にあえぎながら、阿闍世はイダイケに言いました。

阿闍世「母上、これは私の心が生み出した病です。私の心が癒えないかぎり…
どんな名医も治すことは…できません」

わずかに無事な阿闍世の掌に、イダイケはぬれた頬を押しあてました。

く♪おわり

翌日、大臣たちが集まって話し合いました。

大臣「お気の毒だがとても耐えられる臭いではない。おそばについていれば我々が毒気にやられてしまいそうだ。致し方ない。一人ずつ順番に我慢のできる時間だけお見舞い申そうではないか」

提婆達多にそそのかされたとはいえ、無実の父王を牢につなぎ 死に至らしめた阿闍世は、
<自分は無間地獄に墜ちること もはや必定>と心底恐れおののいていたのでした。
そこで、ある大臣は、地獄などだれも行って見てきた者はなく、一部の人の作り話に過ぎない、
そう言って王をなだめようとしてました。また、出家の僧が父を殺せば逆罪でも、王が国を治める手段としてはありうることで罪ではないと伝えた大臣もありました。6人の大臣が、
それぞれに自分の尊敬する師の説を紹介し、王に、
これらの師に教えを乞い心の平安を回復するよう勧めたのでした。

7人目に阿闍世王を見舞ったのは、医師の耆婆大臣でした。

耆婆「王様、夜はお眠りになれましょうか？」

阿闍世「体の痛みに加えて積み重ねた悪事の罪の重さに日夜心が疼く。生きながら地獄にいる心地だ。だが実際の地獄の苦しみはこんなものではあるまい。眠れるはずがあるろうか。耆婆よ、私を治せる医者などいないことをお前は知っているのだろう」

耆婆「大きな罪を犯されたとはいえ、王様はそのことを深く悔い、ご自身に対し、また人と天に対して羞恥の心を抱いておられます。そのお心を、仏様は誉め、その慚愧の心が人をたすけると教えておられます。」

「確かに王様のおっしゃる通り、その病いを治すことのできる医者はこの世にはおりませぬ。しかし、一切の罪を破ることのできる方がいらっしゃいます。どうか一刻も早くクシナガラのお釈迦様のもとへお訪ね下さい。」

耆婆の熱心な勧めにもかかわらず、阿闍世の心は重く、自らの罪の深さに気づけば気づくほど、お釈迦さまは一層遠く近寄りがたく思えました。

そこで耆婆は、お釈迦さまの45年にわたる無数の教化の歩みの中から阿闍世のような人々や彼以上の大罪を犯した多くの人々がどのようにお釈迦さまに出会っていったかをこと濃やかに 心をこめて語りました。

その時です。どこからか大きな声が響きました。

頻婆娑羅「阿闍世よ、今すぐ行くがよい。汝の重病を癒せる唯一の方がまもなく世を去ろうとしている。今をのがせばおまえは、未来永劫の地獄住まいぞ」

阿闍世は痛みを忘れて跳ね起きました。

阿闍世「誰だ?! いったい誰の声だ?! 姿が見えないぞ! お釈迦様の元へと勧めるその声の主はいったい…?!」

頻婆娑羅「息子よ、父の声を忘れたか、早く行くのだ」

非業の死を遂げ、なおも我が子を救おうとする父の声。阿闍世は、悶え、そのまま気を失って倒れました。

【阿闍世 着席】

身体のできものはさらにさらに熱と膿を増し、悪臭は一層耐え難いものとなりました。

【頻婆娑羅 着席】

照明:(先の言葉が終わってから5秒後に)

内陣の「主電源・スポット」ON さらに5秒後「輪灯」ON

(本堂はそのまま 舞台上部とスポットライトのみON)

しばし間を置いて(場面が変わる)

♪音楽 (く♪おわり)までナレーションと重ねてBGM

曲は三帰依文:みずから仏に帰依したてまつる)

【釈尊 内陣へ入堂・起立のまま】

その時、クシナガラの沙羅の林におられたお釈迦様は、はるか王舎城の阿闍世が、悶え苦しんで倒れたことを知って 言いました。

釈尊「私は阿闍世のためにまだこの世を去らない」

傍らに居たお弟子さまの迦葉は不審に思って尋ねました。

迦葉「何故、阿闍世の為と申されるのですか」

釈尊「阿闍世のように、罪に苦しみ、救いから取り残されようとしているもの、
迷いの苦しみの中にあって道を見いだせずにいるものの為だ」

お釈迦様は、このように答えるとすぐに 月の愛の三昧 月愛三昧(くがつあいざんまい)と
読む:くがたいざんまい)では聴衆に意味が届きにくいので)

という、癒しの光を放つ行に入られました。やがて

照明:菱灯籠ON

月の光のように柔らかく清涼な光が王舎城に届き、照らされた阿闍世の身体の腫れ物の
すべてが瞬く間に癒え、消えたのでした。

【阿闍世 起立】

♪おわり

【釈尊 着席】

【耆婆 起立】

意識が戻った阿闍世はまだ夢の中にいる心地で耆婆に尋ねました。

阿闍世「耆婆よ、いったいこの光は…なぜ?…」

耆婆「お釈迦さまが、王の為に放たれた光です。王の病いを治すことのできるお医者様がこの世には無き故、まずはお釈迦様が王の身体を癒されたのです。次は心です。」

阿闍世「お釈迦さまは、私に会ってくださるだろうか」

耆婆「病いの子に親の心がより強く傾くものと同じ。お釈迦さまは罪人のあなたをこそ待っておられます。」

阿闍世「善き友耆婆よ。おまえと同じ像に私を乗せ、私が地獄に墜ちぬようにしっかりとつなぎとめて、どうか無事にお釈迦さまのもとへと連れておくれ。」

【釈尊 起立】

♪音楽<♪おわり>までナレーションと重ねてBGM 曲は「三婦依」

やがて二人がクシナガラに着くと、お釈迦さまは沙羅の木の間にくこの世の最後の床を敷いて、横たわっておられました。周りには沢山の人が集まっていました。人ばかりではなく、牛、馬、像、犬、猫、うさぎ、鳥たち、それに蛇や虫たちもたくさん集まっていました。

阿闍世は進み出ていく勇氣も力もないまま、ひとだかりから少しはなれたところに耆婆と共に腰を降ろそうと・・・

【耆婆 着座】

<♪おわり>

・・・(と)その時、人々の間からお釈迦さまの声が聞こえてきました。

釈尊「大王よ。そこにおられるのは大王ではないか？」

「阿闍世大王、よくぞおいでになられた。あなたを待っていたのです。さあこちらへ。」

阿闍世 ……なんということだ。お釈迦さまが、このような私を呼んで下さっている・・・

お釈迦さまの呼び声に誘われるように、阿闍世は一步一步と前へ歩みだしました。人垣の前方までたどりつき、横たわっておられるお釈迦さまのお姿を目の当たりにしたとき、阿闍世は両の手を上へ上げたかと思うと、そのまま全身を大地に投げ出しました。臥せた顔を大地から上げることができません。心の奥底からつき上がってくるあつく狂おしいもの。それが涙となってとめどもなくあふれ出しました。

お釈迦さまは、無間地獄に墜ちる他なしと自分を定め 苦しんできた阿闍世の心の中を知りつくしていました。

♪音楽 (BGM<♪おわり>まで)「恩徳讃Ⅲ」(*1オクターブ上げて)

釈尊「大王よ、あなたの父 頻婆娑羅王は数多くの仏をよく供養された。あなたに罪があるならば、供養を受けた我ら仏にも罪があるべきであろう。深く関わりをもった諸仏が罪を得ることが無いのに、あなた独り何故、罪を得るというのだろうか。」

「大王よ、頻婆娑羅王が仙人を家臣に命じて殺害したことはご存知であろう。彼が殺す者であったのか、殺される者であったのか、それを色分けすることはできないのです。さすれば、あなたが地獄行きを自ら決めておられることも、果たしてそうだと言い切れるであろうか？」

このように、お釈迦さまは、「大王よ、大王よ」と繰り返し呼びかけながら、罪ということについて、殺すということについて、人間の行い 業・縁 ということについて、仏の眼差しからどのように見えるのかを、言葉を重ねて解き明かし、阿闍世の執われのひとつひとつに光をあて、解き放ってゆかれました。

<♪おわり>

やがて阿闍世は面をあげ、跪き、両の手を胸の前で合わせて、お釈迦様のお顔をまっすぐに見つめました。

阿闍世「お釈迦さま、私はあなたにお会いしていなければ、無間地獄に墜ちて量り知れぬ苦しみに苛まれ続ける他ありませんでした。あなたのおかげで今当に私は仏さまに出会えた！ 仏さまは私の煩惱悪心を破り砕いてくださった！！
救われる種をまったくもたぬ大罪人の私・・・悪臭を放つ伊蘭樹の種、この身に起こりえぬことが起こった。仏力により私の心に香り高き栴檀の樹が生まれたのだ。賜った信心が、美しい香りを放ち、罪悪の悪臭を消し去ったのだ。」

釈尊「大王よ、よくぞ覚られた。あなたはその信心において、必ずや世の人々の悪心を破るものと、今なられた。そのことがはっきりと私には分かります。」

阿闍世は立ち上がりました。

阿闍世「お釈迦さま、何と もったいなきお言葉。私の悪心を破って下さった仏様のお仕事の為ならば、私はもう地獄さえ恐れません。人々のお役に立てるならば、私は地獄の苦をも厭わない。(気持ちの高鳴りに合わせてリピートも可。「もはや私は、地獄の苦をも厭わない！」)」

阿闍世の姿は雄々しく、全身からまばゆい光が放たれているように見えました。

沙羅の林に居合わせた沢山の人々は、阿闍世の放つ光、彼を地獄の苦しみから立ち上がらせたその光を 共に浴びたのです。人々もまた一様に立ち上がり、

【耆婆 起立】

王と仏を褒め讃え、みずからも覚りを求める心を起したのです。

横たわっておられるお釈迦さまの口元が沙羅の花が咲くように そっと ほころびたかと思うと、そのまま お釈迦さまは、静かに 目を 閉じられました。

♪ 音楽(回向:願わくは 一切世界の人々と)

照明:本堂すべての照明をON

(あらかじめ配布の歌詞を聴衆が読めるように)

2題目から釈尊、阿闍世、耆婆、語り 共に歌う

【一同 礼】